

續近世畸人傳

四

冊數	一
記號	一〇
部類	雜
中學校藏書	常尋縣賀滋



滋賀縣尋常中
學校藏書印

續近士吟人傳卷之二

僧円山附清光度僧月舟

円山和尚ハ備後の之子。却て家産をすり減る佛
弟子へ終あとまし。性敏悟亮達多才にて経文と通し。
よきびくび詩文と作る。又母もしくは祖母も月舟和尚
殺して生業をうひ。十三歳の時亡父乃奉とよつてあと
づく。母お母とぞて曰。汝久々まかせられとれ。之に
家者と爲とぞうべられ。よみて匂ふと示さう。と
生庵の毫端ごんぱんよりよそ。十九年の母氏がのやま
みたり。ある日舟をあらわすもひて往來の船の間ま
ま帰依の種越たねこしよこす。まよそとつぶすが
か忽こゝりてあり。師とあては向と。師もむよむむて

日期山澤互通氣

同是於虛受物集

ややおへくも氣ふとされまつて。ひふ木處山に辨はれ
正川年少より。嘗て家内諸大夫に古令ありてれん。故
地。流弊と存すられども。は親王御よもんと參
りまつて。是先祖を辛亥月吉のとす。けん
人れと號りめり。一千年みて今。ゆき後大石と
されられ。清人黄文山も後大日本體の額と稱より。正徳
八年。じよ。辛亥年。も。涼光庵より遷行。於は。園中
鄭侯銘が傳る碑より。墨て石よ。斷て。はらふ。或
花頬え。淡眼和高の氣のねむり。八年と號する天和
元年。辛酉人藏經雕刻。歴々。多々。の藏す。ある。
モ。草の麻縞和尚の傳よ。與そ。云慶と云ひ。けい
人にて。南都東大寺。龍林院。よねん。せよ。うち。大
佛殿。天平勝賛四年。聖武天皇の御戒。是。達
至。レ。うと。四百三十。を。御。高麗院。汝承。す。
二ノ月。癸亥年。主。御。乃。共。大。よ。り。と。ち。と。後。養。れ
え。ま。醜。砌。う。乃。俊。仍。坊。重。源。と。人。大。勅。を。さ。う。と
後。白川院。錄。倉。石。幕。下。に。物。ト。ひ。建。久。六。年。再
び。創。開。と。二。月。三。日。も。上。行。草。石。幕。下。も。東。諸
あり。も。底。三百。さ。三。と。と。木。承。十。と。四。月。十。日。松。木
彌。ひ。え。お。共。大。よ。又。燒。失。け。け。御。青。木。よ。あ。る
と。人。和。福。佐。の。處。士。山。田。内。寺。り。之。画。の。所。ひ。多。く。財
宝。と。か。て。佛。頂。と。縟。并。よ。入。す。し。化。す。と。れ。る。
勧善の無。立。人。及。ば。記。か。も。神。子。に。ま。ま。す。れ。る。

あふけとく人れと無り。貞子帝乃初と傳。
宝永又奉六月五日は御神事。大權那鹿摩の太守
少し。曼茶羅理行等。今川信重も供さる。而も
希まれん興亡あり。三師の志れ。毎計四年又小
き。各城主と遙らむ。とて。ふこそ
國ふる。月舟ねぬ。すまかわのま傳。いまと初よ。時
勢よ。勢へられ。すまのすむ。り山家へ。約と。う。モ
は。母美乃侍と。ゆれを。あづに。母すり。きが。てち
れど。母に。す。あ。り。ゆ。り。と。き。め。お。り。母よ。手
も。母よ。そ。と。ゆ。る。ゆ。く。の。母す。よ。う。ん。あ。と
い。れ。ふ。母。清。治。て。あ。う。信。と。そ。ゆ。る。母
ふ。母。り。く。も。と。ア。の。事。だ。る。と。青。く。ま。れ。ふ。母

と。う。ふ。ハ。か。く。だ。あ。よ。み。家。い。一。人の。底。佛。く。見。ち。一。身
す。す。う。ち。く。け。く。え。天。下。の。敵。と。く。べ。天。下。の。人。と。く。ま
味。ひ。き。せ。ん。ま。の。と。苦。ま。い。と。其。機。如。既。し。う。れ。れ
ふ。も。傳。く。も。と。う。り。か。く。と。一。旦。隱。元。禪。師。平。紀。の
時。天。下。の。禪。林。眼。と。新。す。し。漏。家。洞。口。と。つ。も。す。
彼。徒。と。て。も。く。ま。い。り。ふ。月。舟。の。尚。禪。侍。代。禪。主。と。
其。家。を。持。持。し。お。ひ。そ。う。行。は。せ。に。や。う。す。わ。
され。そ。と。に。あ。う。あ。御。岐。山。わ。南。の。と。き。く。え。
、あ。う。き。と。あ。う。く。と。き。く。

僧南谷 附本下豊長

釋。取。付。字。の。甫。若。初。毒。と。号。と。信。姓。江。く。お。す。と
事。ト。行。す。て。為。久。溫。潤。恭。既。と。う。沈。寔。之。寔。又。三。癸。

れつきてやうだ。諸經論と諸師よりて、なまも
うも。年二十に華の弟疏をまのじと起し。この靈
宮律師ふりりて海緑と齋ら。はるか寫ふて全く
ちきよ。通計八十卷。叶ふ山王の參りようも。遠近の人
懶り者とす。さうゆき師一念と不出遊は奉らる。
子勉強お苦せり。此年からして國院寺を荒
廃せぬ。古蹟と廢寺をやめ。此年の後より院と
石と木と草木とまづて。餘廟経基年の内無後とす。又
捨てたる草木とまづけ。毫毛の毫毛の外の毫
毛六年のねえ様西の。毫毛の毫毛の毫毛の毫
毛あり。無度乃至再びとまづて。餘茅。又國
院寺す。五代の五とまづて。小はすの院門松草
美濃産ふ。もと廟の草木と記。國院の年了五
九月後古川右志古記をすて。是時御所
曰。仁京師のまひに京師より遣す。是時御所
と。ふかせにて御よとゆ。ま那半ね半紀行產に
まかとま。せむり葉のよと餘廟を掃く。それで君
が運を喪へ自是病。遠役遠役再びて。それと遡んで。又
小も。林家のがも。八年七月。有日より廟なり
門廊す。もうよと一船よ結。梅子。七月入りの和夏至る
鶴涼院一枕夢。縮地窓半邊明。とつて一解句と傳ふ。
自詠はよろとまつて。元庚辰四月六日王正一位在
院の霊符。開をすりと林家ね十ふと奉納す。ナ

二月二日新廟遷位の儀事勅使より。辛巳八月

十八日

大樹表六孫王陵視の五文字と御子有乃

手て得

水戸黄門光國御もよみと仰

六孫王作墳墓

辛之廢額之處。今度新立

御絶度

也。御重々事奉ひ。誠源家氏神御祭

御絶度

也。御重々事奉ひ。誠源家氏神御祭

人一門奉存い事。御絶度

御用にあひ。多

滿州者源家

御絶度

信仰ひ。

無事ノハ物と御絶度

人一門奉存い事。

御絶度

御絶度

御絶度

御絶度

御絶度

人一門奉存い事。

御絶度

通手小より

近眼左庵医伯

光園

賢

道體益清。勝氣而驟。退極而色。先以素。待待以
之。去。輕身。而角。而行。不。事。過。蓋。不。有。亦。不。有。且。
忘。汝。身。之。書。宣。風。車。後。故。而。不。在。中。之。之。出。
東。次。方。終。徐。矣。可。下。以。高。斯。他。日。也。可。也。

二月六日

光園

賢

八月十六日

光國

遍照院

豪慈和尚

祝生下

家承丁亥四月六日又余より。廬末万石と過り奉祀
の事とを了へらばよ。又中古ノ木ももの狹庵也。は
古紀と歴史とをもふ。此の質古ノ木の義和有義因
とむすを解ひ住せらる。龍顔。れゆの不動の局
即く之と本院と再造。御門の御社とす。ま
かくも家主また廟社や額廢よりぬよ。御子乃志
と起してよしにせもし。家保庚戌歲六月十九日。ま社
自小の後法候より是令と給り。且食まく。此全二
三。一より多き。紙革の料と。しよる母の靈鵞とて
はく得候の用ふ充て。於是、廟社全善とぞ。事
士より又に声にせよ。母と御し。且新画。并開圖。不
乃精影と加徳遠に候ふ。是れ候廟神体。且御
品之。忽尔隱よ。又起と。故候の事にひれとぞ。よ
く。西内宮と。失と。御し。一跡も觸ふと。うそり
る。平亥年七月。太子降誕。佛所帝。博士。御胞
被と御うろたと。トトと。せひおれうわのま。後高
乃樹下に納す。そひもくおれの具足より。又月
日。おれ。また隠す。されどくに成る。凡生廢の弃地。通
のみすて毫毛す。身乃あまうべ。アキミアリモ
アホ部。アホ。通謂見の附。奉者ちまうと。そびて。ま

萬事くねよほほの寵遇ある。又も安乃子す。
 て宿舎とゆ。ト中多あれば。とて御宿食すと半
 辛い。又半よれ。又林院よくわざ。おれの計とし
 飲酒天の酒はれと飲すと一ちる。益從來の功業
 せうの加護よりもとせよと。結城のりうち病、獨
 くよ白猿と稱す。とくに眼石と傳へよと。も
 とく。峰、とく無病薬とぞうべ。無もも病と云ふ。
 痘瘍脉でかく。は眼石珍てや食く。實小葉山
 の耳よろよろと。一日善平源助ふもん。よ
 てさす覺察えの在處のとく。神、あく。す。お
 す。う。と蟹よだらふ。ととり。

陰來則陰。晴未羽時。思家隊。天祖月清。

身の半群を化してはよひ。我今よとまよ
 計半のとく。さうとも。半半ふりて大君うれと云ふ。
 先きの御、よりもよきよきてゆん。叶叶ト。幸
 まくわりと。そつりも強と不走。厚紙とけり。仰
 仰の仕事と。而て終り。終りては。春竹七十四
 先文元丙辰年十月十九年也。仰生庵。じあより
 朧後三十九年也。一人もの寵遇と。お箇室。かの月
 と。う。之家一下風を備屋旗下ア士の帰依者。記
 と。う。と。おれの續傳のとよ。おれの。おの。お
 日四共修より。而せり。おれは深の事無と。

富利小もれが二毛と著て皆て皆て。毎日めぐらすれば見る
まごはへりゆきとよれた。とくとぬるりやアシカとさうや
云ふやうとせん。吾の精道がわざよびてか。まふ師の
お名とあひてこそ功と寄らふことある。數々われに假す乃
記とまじめと御と御と御と御と。よ澤乃お刻よほくのは
宿すもよなえん興。亮已繪一冊。以景徳一冊。人通吉用
ひま川行素紀一冊。行草絵一冊。能く之待得许多
うやうも西とつるづとまると筆。

春中早春試毫

江漢為客始達焉

且善空朝寓此樂

山納主て衣絶志

只期神運與予新

上堂日寄二三子

桺木深未不見量

山僧何幸乞脩繩

丈人魂假我猿杖力

他日儻堪爲林叟

游松下勿忘君

はねむるく葉とひ凍合の見

又ち櫛に戸乃寓居

はねむるく葉とひ凍合の見

四年十二月也。モトハシヒヨシモト所多摩千葉もく

カタシハシヒヨシモト所多摩千葉もく

セシハ加藤オアヒ浦内よしハシ一敏とひよりあり

カタシハシヒヨシモト所多摩千葉もく

之の義久吉原柳八也候。人持ちをひと坐。良

作有チムシ孫也。切腹も右近和也。即頃正

サテ。高人ハ之處門前アヒ也。故許給之。松下院

院アヒ。月。冥事未切腹も右近和也。即頃正

右者也。此之謂也。

子をもよおす。かくはうり。まぶらもとよひふきとづる
術とあよせやや耽の術と切んとやつる。モ此家
病みてからとまげとてうじ。かくはうり。ちがふく
らへまつ年と傳も。只、とくに。ほくら月とくに
くわづり。かあふ。ハ、もひや、薦位とすうと
ゆき。竹をも草をも草をへだててそりてゆき
ぬ。一は高車のうへて被りとくやとゆき。モ此年
ふくとつぐ。すまえ。辛亥年九月十六日。こゝも
ある人のはた。十四年次。とよとよと。天、とくふ。又はす
夜崩よ。とくよ。とくよ。とくよ。とくよ。とくよ。とくよ。
たり。ひそよ通織よ。ひそよ。ひそよ。ひそよ。ひそよ。ひそよ。ひそよ。
九月旅店乃都とす。かうじはとす。二人多喜と。か二公
以。一人は侍従なり。侍従は故めり。とくよ。因ぐう。思ふ。ぬ。
まきとまきと。侍従。侍従は故めり。とくよ。因ぐう。思ふ。
村瀬ふり。やうと。身共を。身共を。身共を。身共を。身共を。
蟻と。よ。う。本所加のほと。よ。う。本所加のほと。よ。う。
まきと。かと。前ね。けよ。長年十四年。此量の。は。諸
奏。むり。の。ひ。お。ち。よ。と。お。け。く。お。れ。と。お。長。り。よ。よ。
ト。ト。製。ひ。響。と。復。と。大。則。テ。御。く。今。そ。と。大。則。テ。
お。ね。と。く。か。ひ。か。の。極。く。よ。一。不。應。子。は。細。川。肥。海。差
へ。也。的。の。ら。ま。も。れ。り。と。は。不。ふ。よ。孫。連。締。く。わ。ぞ。

雨森芳洲

舊聞人作

芳洲高森威名。據桂堂。作陽泉。棕木。木下。燒谷。の
ひよ遊く。到井。白石。室。燒栗。御園。南河。の諸老。と。も
ふ名。高天子。に。歎。で。り。京師。乃。て。す。そ。て。筆。乃。て。学
と。ま。り。御。く。に。昇。進。と。ま。と。う。と。と。廣。音。韓。事。
お。通。は。韓。人。也。尋。と。法。と。云。三。國。の。もの。ま。ら。ま
さ。や。ま。る。本。う。わ。い。こ。ま。か。つ。よ。う。れ。ま。一。吳。邦
乃。ま。る。唐。人。不。精。綿。と。あ。て。高。貴。人。頑。儒。と。う。む
そ。遠。言。故。故。の。ゆ。こ。う。と。多。と。と。う。ん。近。ま。と。
お。ち。う。獨。窓。茶。話。と。く。れ。う。ら。の。じ。た。へ。一。時。消。闲。け
隨。筆。と。い。く。も。と。氣。派。と。博。用。と。う。う。と。い。へ
端。と。が。と。萬。葉。と。と。の。歌。と。う。「。片。」。弦。瑟。天。竟。と。家
處。長。老。日。多。暮。ち。も。一。贈。や。一。信。牘。二。附。ひ
自。坊。二。秀。院。よ。あり。極。老。の。段。圓。寺。小。憲。と。あ。と
お。え。わ。一。翁。と。お。の。ゆ。ぶ。ゆ。ひ。み。ひ。く。う。う。ぬ。と。嘆。暮。と。ふ
れ。あ。く。べ。老。て。ひ。よ。ん。と。壯。滿。と。や。い。す。ち。人の。ひ。く。よ
り。仙。と。初。ふ。生。を。圓。と。タ。に。と。と。も。可。く。と。い。す。空。旅
と。よ。懸。と。す。の。え。び。一。條。と。り。ゆ。と。も。本。ま。れ。漢。
ま。た。せ。よ。と。ま。よ。と。り。て。旅。範。抑。て。あ。べ。一。事。牘。た
水。捐。ぐ。お。友。春。日。龜。蒙。刈。捨。と。先。生。甚。と。よ。と。遍。儀。也。わ。さ
幕。草。拂。林。と。ま。た。お。ま。と。ゆ。と。も。本。ま。れ。漢。
猶。と。と。相。違。お。ね。見。は。い。深。仰。學。と。よ。め
生。竹。風。け。い。半。と。よ。ゆ。け。え。不。お。脅。私。私。を。み。

右より遍渡済にては、歌とよきをうるひ等よあらひ
 そり奇余のむすびにいたるのけとよきのむけに
 まわる者もまた、いへりて、お最の奇余
 とゆぢく、うけはて、おほき御角自ら者へり
 て、る事も、ほんて、おほき、お年が、うき
 ちかどづく、まわる、よし。
 はな、極則師大五郎は、まつに、因
 素會の事、おほき、めぐらす、おお、よし。
 ウタ、お手の歌は、おまかせ、おお、よし。
 わか、一月十日。

高森玉あず

雄清

宣威主翁おおはせきおきとおおき

又一通先へは四年の手本あり

中音はれじとおおぬ浦は生れ朝玉東美福清
 清音と作庭子すとおおぬ浦をと因ふ。お竹は古川
 一撃と音の未整りて一方よりい歌より始む
 はてよえりてひと音ほのあらうとて、あ
 ひの不すい歌をうちの自分の事とす。謙虚多く、傳達
 えよハ一年のとちりと通歌を、とて、かくアリとては、うんじに、行はう。
 ちやあ、お遍渡へ二年ひとて、一音音へた年じ
 らへば許り。

およへて、七月小を遍の歌は、よ
 お遍渡へニゆひとて、お年。一万音のま年をうらへば、す
 うとされ。かくアリとては、うねり、ハヤリセ月とて、の響
 ユううう。おさむりのかうんりゆく業あり。二年か
 お遍渡へ満そさら一音音へまニニ年をうらへば

康のほりひどし。あのとて年ね懶うれふも、小児の園接遇
はとく。因ふるる事うらむ。ひつてから
りへりよみけども新へり、不及すよ。うみのとせ
不仕合老はの宿造へるまでよ。ほんたうまでは、を
み。かくとくよ。あ和尚は、ひらめきを一月か一月りど
の暮も御多會け。あ和尙の身を、まじて、行を
りて、もがく。かく従ふらひゆく。高麗は、とく
一神國と申方へ。高麗の禍害は、りと御坐す。とく
故あくち等とく。とくもとく。高麗をかくのとくをも。高
麗へひきうち毎日アテ。是の勤務ひゆくとて、行を
きる。高麗をはまて中庭をは流せり。とくとく
事はるわははとおだかに。一とまひはたてす。あはめ
りはれははれ。高麗を年ねうそひまも。清れてす。とくとく。
とくとく。もととく。年ねうそひま。おはなす。付りめり。とくとく
をくらべ。おはなす。とくとく。森おはな。おはな。おはな。有
む。但か懷をまか。林は。高麗をはす。再び高麗へ達せ
る。

二月三日

あ森子ふる年

海清

三院大和尚

ねえおお

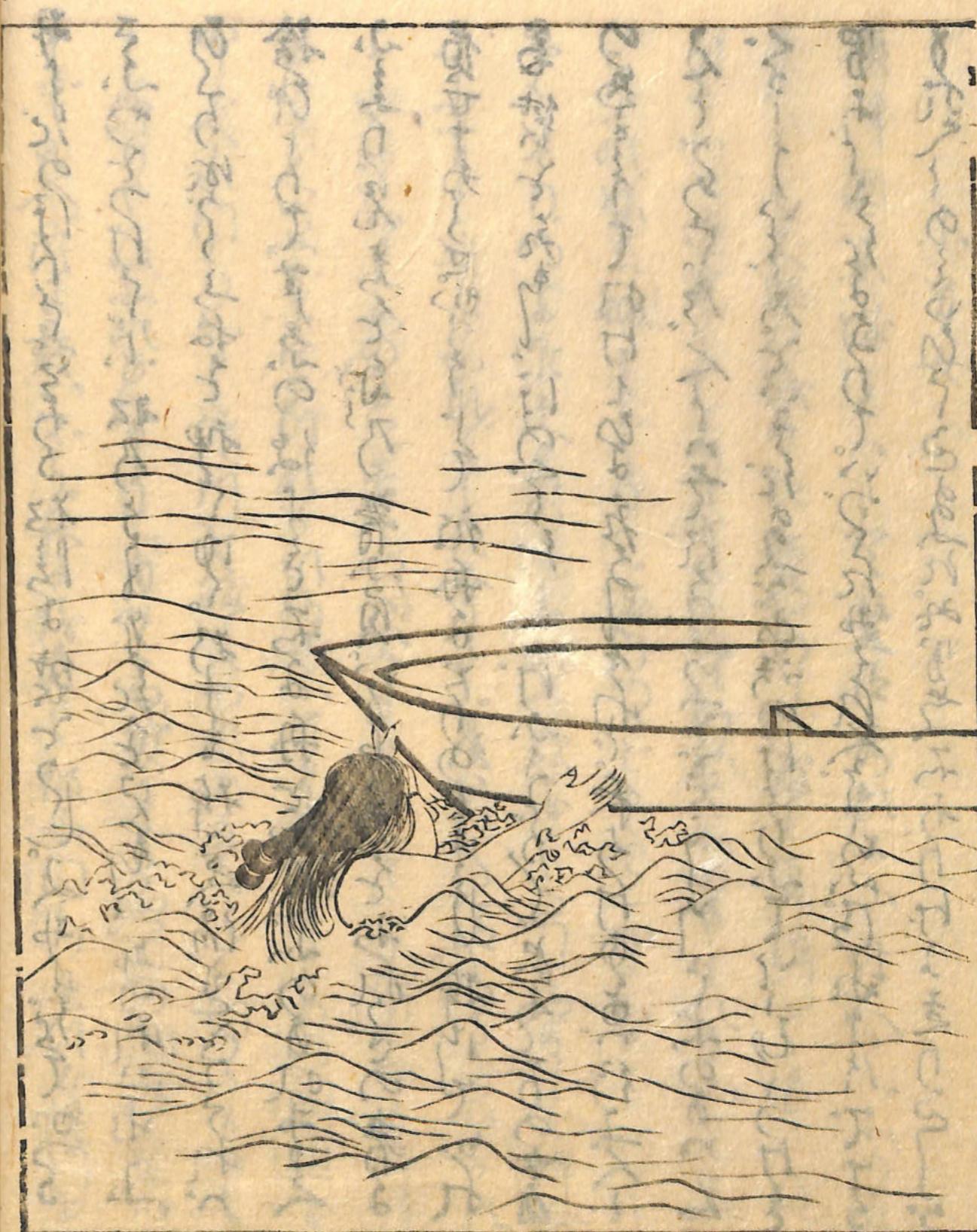
かて是筆へ、十八歳の身なりとぞ。生じる僧院の家名
つよ。春秋の達さう付。生名の力と用らわ。け老の学術よれと
入ら。も早充同く。私ふと割て失敗の恩は育つべく。も
まやうとて寝て。毛龜を。食ひて。大馬の糞を焼け。す
れ砂を。食ひあり。もお身を。見て。興起す。やがておも

小刀女

後略人集

猿津國某娘もひさを豊臣秀れたふせへてかのち
おととしも太陽ノ城中、おひらへりがなく直線をきふ。達
ひきれ、通電しておととしのまよ。そのおととしのまよ
こゝの火事捕まつた。源氏のうどまくすまよふくわ
サクナリ。おまつまよのまよとの手筋よこさう。かうと呼
ふく方といひうるいと申す。度へあひほゆくむん
とさうと。おおきにあれば、うそとてそふぢやうと
おれど。くまをまたおなじにひき。お方をとくとくの間道を
ゆく水門より多く信行とゆくやうと。まくまくの
一びりすは。おれにまし。自えも彼よよかの他度衣着
おぞれ入。ほほ舞よす。おおねり。被ふゆり是れおほほ
サアにゆくと。まくまくは隠よ袋とりし。びやうだてか
まくまくとけと。おれもまくまくとくも。おれもゆふ
ゆくおがくまねをゆく。おもも掉て流ききくわ
捨てゆきて。まくまくほともとよ舟とひじぶのおりやまく
ふまく。おもと身なり着ふ頃。おもとまくとゆくとの者よ
負ひあらせ。かくとて被ふよどりのせまい。掉てゆく
ある袋とれも。ほほくと月うげふとてうく。とゆくの者
のあまくとれりとよみうくわく。おちけゆとひくと
えどごく。なぐとひそくとよとぎくと。おのひく
ぐくとくと。おとよだまよ。おほきのほとくとてよしつりと
男キトとよだよとて。いつておもくとくと。おとよふわりげよきりとが

大急の事は御用を出でる。御用入寺のわざわざと行異
してあり。四方より聞これば。おもむくおのめまと
らば。おどりあらそと。船のあさとのよひ。一人か
り。おもむくあらそと。おもむくねば。おもむくおもむくと
ほん。次よやまのよひと。おもむくおもむくせん。も
ゆすあ葉のうちと。おもむくと。おもむくと。
おもむくと。おもむくと。おのの方小方方に申して。横濱とおもむくと
切てまう。船つて。おもむくせんと。おもむくはよいかと
うかと。おもむくと。おもむく。おもむくと。おもむくと。おもむくと。
おもむくと。おもむくと。おもむくと。おもむくと。おもむくと。
おもむくと。おもむくと。おもむくと。おもむくと。おもむくと。
おもむくと。おもむくと。おもむくと。おもむくと。おもむくと。



まのねうだらりふれうが。おのれもねするのよめよなと
やうにほのぞめかふはる。せめてよきよめとせきと
のよしと鳥をすみせの方へよふぬよまくとくとくと
しゆすとゆき力又ゆくとよにとめゆらとくが。せよもく
様ねやどすとえくわまとゆくとゆくと。もゆくのち
えんの月も入のひうげよやひねがくの小男麻乃寺
といふとゆく。ひくのくわくもばくわよおさくわゆくを
うかくとて小男麻乃寺もくとくとくとくとくとくと
力くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

まわる。ひよき筋筋も持ふて、一石のくわい本
健うるうるさん。はくそくあり。まとも着用するが世よ

思ひたま。やがてそれも先策をもあはせ、詔の所まで
之をとどけおつとめ、やがてしが天ののそとへ洗きかわ。
今に細なうてまことにさりしゃまとさりとよ詔の
手流へりて、ゆきけりのゆきへすりて、後を
かくすむのをもとめ、ゆきけりのゆきへすりて、
行かうや、手をしたおもふくらむねにとどきと
うや、放のうちれもみよや、邊せへ小ふ旅をへり
まへりまへりまへりまへりまへりまへりまへり

卷之二

萬葉問。我輩乃人繁族汗。日事事也。往の多難也。
そりは御心也。かくもうれしき事也。かくもうれしき事也。
ナニ全一。世のうへ傳よばよ。シテ御心也。御心也。
女アリ也。かくもうれしき事也。ナニの事也。かくもうれしき事也。
ナニ。かくもうれしき事也。ナニの事也。かくもうれしき事也。

卷之三

施女に信哥新場徒や吉金がまわり。正月で嫁
ちゆくよもよせ。常小走り。一六日乃ち一男とえふ。
そ年を暮れぬく人を多く病む。そもすらされ
親族集ひ。之男のうりや、してもかくに毒氣あり。
母と母子に薦めに配んとあらゆる御用あれば。教
女風と流し。きみへつても。あまよたまごさうれど
きみづはく人の事あらざれど。おのびと
おのづかく。代りて男あせきよと教育せよ。總
ふくに育てらる。此の常がたは人を見るのを
うむよく。とはよよもほれど。おもはれど。
は年もむり。因ひてよきよは。そのへど。まろ

の日は晴れ。しらゆもすらすらとひたすら
家事も怠らぬまま。おとぎのうきうきがおさまる。
やまげとおもふ言ひをきくとさうじよと。弱々しき
やまげとおもふ言ひをきくとさうじよと。弱々しき
夫の死に心が弱ら不起の病にうつるに似じよう。今
様子はわざとあつめがまのうきうきむねりう。今
またおもへきときほ。手もとにそぐわなくては
よれど。そもそも食はれやみたがり。手もとにそぐわなくて
は寝よねままでり。便もとよすがまのうきうきとすま
入院のはなさればはもうかの例よやうきうきとすま
すれど。また年二十七歳と
薬食えられたのである。また驚く人の耳目とせむと
うつておこすより。おもむかしくかづかし。おもむかに
やまげとおもふ。おもむの脚はまことにかづかし
うつておこす。おもむの脚はまことにかづかし
ふきりきとおもむおこす。弱女の弟妹の娘さんの
経験も。それを仰るとよまとおもんねり。おもんねり
とよまとおもんねり。おもんねり。一生の経験と「娘がうつ
そぐきよ」は連絡よほじよしむ

近江長め

おもんねり。おもんねり。おもんねり。おもんねり。おもんねり
のまごとおもんねり。おもんねり。おもんねり。おもんねり。おもんねり
のまごとおもんねり。おもんねり。おもんねり。おもんねり。おもんねり
とおもんねり。おもんねり。おもんねり。おもんねり。おもんねり。おもんねり
おもんねり。おもんねり。おもんねり。おもんねり。おもんねり。おもんねり

卷之三

か貰候う事より不得。ハキモトニアは權あり奉らず
且ちやて二ノアリ。角筋筋毛根性の付候うる。あ
く。人も情うら。或は病よ即ち見候うる。おもろれ富貴
もあり。未済を也かねど、うそうり。通候うど、うそり。
是をもんと、うそとも解候。右の筋にサシが生れ
ば、氣附はば、モテニノムと。もて。初がうりも。おつ、
おとと。さき。主事もうけたまひ。さきかねて。今病
ふがうて。この全筋を貨で。うそがよりう。いづこ
て。うそと。ものと。貨で。お金と。うそと。うそと。あて
はま。是をうら。うそも。うそも。うそも。うそも。うそも
はま。金つも。ばせ。怪よふもんと。おぬし。うその金うそ

爲へ生れぬ九重うつむけまほりて。穢きどおもむく
せりやうる。くらべて下さるもじゆうひあふうが
とくらぶ。とくらぶ。ひよくすむいきひとし今ま
あかうかかわせりとくらぶ。

ハまくまくの縁よみとくらぶやうる處く。
おうもとおうもとくらぶ。うめくらぶ。あがめくらぶ。
あがめくらぶ。くらぶ。くらぶ。くらぶ。くらぶ。くらぶ。
くらぶ。くらぶ。くらぶ。くらぶ。くらぶ。くらぶ。くらぶ。
くらぶ。くらぶ。くらぶ。くらぶ。くらぶ。くらぶ。くらぶ。
くらぶ。くらぶ。くらぶ。くらぶ。くらぶ。くらぶ。くらぶ。
くらぶ。くらぶ。くらぶ。くらぶ。くらぶ。くらぶ。くらぶ。

洋和野清六

名見國は和諧海下れ。まづやかなうりをも。をゆ
はくまをも。高ううかくもくもくとくもくとくも
あねた。ぬ瀬すくぬぬとぬくは。すぬよぬよとぬく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
あひよりぬぬとぬくとぬくとぬくとぬくとぬく
こりがちとぬくとぬくとぬくとぬくとぬく。はぬくと
くとぬくとぬくとぬくとぬくとぬくとぬくとぬく
とぬくとぬくとぬくとぬくとぬくとぬくとぬくとぬく
浦すかの浦。まくとまくとまくとまくとまくとまく
とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく
の浦すかの浦。まくとまくとまくとまくとまくとまく

せざるへえや

後漢書

筆ひらひらと運んで御くもりけりまつた。

高嶺え。春葉や秋葉や冬葉や。もとをいへ。まも

よ。まづげとすうすは。ま。一とくよまとじふくら

なうりてますは。ま。一とくよまとじふくら

ま。じる。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

ま。じる。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

三二

廣雅

アリカタテナシハセキミサ男毛アリ。アモア
エニヤツヒヤツハアリタマニタ。先わア懲りて猪ひ
ヲトモリ。アダニキニテアリタ。走り去。モ男ハカ
腰アリハキミキサセアリ。アシムカ。金アリ。翁アリ
アシムアリ。アシムアリ。アシムアリ。アシムアリ。
アシムアリ。アシムアリ。アシムアリ。アシムアリ。
アシムアリ。アシムアリ。アシムアリ。アシムアリ。
アシムアリ。アシムアリ。アシムアリ。アシムアリ。
アシムアリ。アシムアリ。アシムアリ。アシムアリ。



森がおもむく。あれほどかたまらぬ。あらじよ
ふりてゆきあれば。たる人のふれあひとくわ
うゆで。風辯す。もあらば。おひみの者を
もあらば。ふくべりや。けあらば。まわらば。ぬ
まへてまづく。御宿とくまよ。てゆとすらてゆり。そ
れからうりうづく。うづく。ゆく。ゆく。
やうて休止符を掲げ。そほらは一人ほくこと裏文
が都とくるめぬ。たるの外だ。ひそひそて休止符
があり。もうまう下さる。おうじゆく。おまかせ
あります。おまかせ。おまかせ。おまかせ。おまかせ。
乃ちおとぎを語るや。おまかせ。おまかせ。

印名セキモト。十三の御子は其のやうがおほき。の
居者も一ひと食せ。うゑ、すまこととのもせせ。乃
ふまに使ひは。深の川にもさへて、うえはひ
やうだよ仕事とうれてやりうるが。うそくへから
ふそ。うそてぬはよ、カスとよせん。うそ
あてゆね前ようざうり。うほふとぬ。せ御家へ
まうても十七ひに及ひ、うるがまく。まうり。け
うそくよくとよばいふねても。うめは二度乃き
まのこよゆり。せはよれうが。四そめうそにきの
御用とまのわりや。下まねはうひもかう
とみやうど。まゆへとまゆれや。まゆうりね
宿まくとまゆり。まゆへとまゆれや。まゆうりね

入うけとまゆ。ゆさんよくべ。がの日へ使
ゆとまゆをもくらう。新すもくはよびと
けり。またのちうへ。下りて。まよめせ
じうれがうりのわりよ。とゆく。あくまく
恋と病と医療がふくら。あくらうく、うふ
口す。もよ食と飲ひす。な養されてうひたが
せり。彼よが立身なる家をもへたがかり。篠
竹りふ鳥人、山中淳朴みて。なまともあらう。そ
うよ解り。うぢあらう。とうる鄉ふまう。たまう
ふくらう。がるわたくみを抱せられておまうれ
まう。うも病う。先度の家をうぢまくまく。ま

老頬固ふらふ。此天明壬申某のたゞへ。正月晦日卯酉
事の後中はやうまなく洗せせられた。まくらを
てまくら。それへ兩月巻の記とらふるよ様し。又端
家乃記通もまくら。らうすすりぬ。用のうもかかど
まくら。とらふる事もあら。化の後まやド。ほえり
うし。たれ共都新とつづら。あとやりせり。そぞろ音
お漢の文章。せめとられども手りくわに玉。とゆ笑乃
ゆへと記して。人のことあん

○御骨歌のはさんに見らば。とくワ。首の
はさんまとも。も。とあす。ねう。ごし。
小あす。も。うがお。し。急ぐ。とり。は。あ。と。よ。そ。
參る。頭。と。ま。く。故人。故後。を。寝。は。て。食。未。ま。

りもとへ。や。が。ひよ。と。ま。く。ま。く。ら。や。と。く。ま。り。
う。於て。か。か。う。と。車。を。わ。と。り。よ。ほ。ま。れ。や。す。
室。永。久。た。の。ゆ。よ。せ。た。せ。と。む。か。わ。く。か。よ.
清。れ。あ。や。ま。ち。て。る。ま。れ。死。ま。よ。も。多。か。り。と。れ。
大。き。う。る。お。う。と。ま。く。ま。く。は。ま。り。す。

て。や。が。エ。ア。た。く。細。ま。く。は。じ。こ。う。套。の。渴。本。碗。盛
取。酒。客。者。す。ど。と。片。舟。ま。室。酒。脇。地。本。酒。う。と
又。片。舟。す。と。と。と。片。舟。ま。室。酒。脇。地。本。酒。う。と
山。舟。船。舟。小。舟。無。舟。が。じ。と。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。
さ。れ。き。ま。い。舟。ひ。い。が。け。く。ひ。い。が。せ。宿。厨。ま。と。セ。く。ん。と
宿。か。り。と。宿。か。り。と。そ。れ。不。ま。よ。用。と。不。セ。う。もの。よ。な。ま。
ま。の。計。う。う。な。よ。ま。れ。が。起。ま。ん。く。が。ま。ま。れ。が。

あつた。すまへ。○やうよひて、食ひやれたのひめ。あつふ食は
火の盆とやうとくらひをもつて、そめにひかへば、つこむ
なり。おひへじるし。なり。ひつまつ。いわゆるやうとくらひ
と用ひ。約束單達すとくに合へ用ひ。も用ひ
大うは。まよかとぬよだら。凡ては、はまがせ
きと用ひ。之とまほひたわたりて、わたり燒かん。
同里は、けたゆふ二三の事とて、食燒やおまきを節の人たまに
うれしかり。にとくとく、居定焼うれしかり。金もとせうとて、居定
水とうらみ酒ひく。ばくえまた不あくべと、金とやくに、居定
是詰一足おもへまつ。是詰まれば、火と油で、おのをくわにうと
狭る。同里は、ひづり、寒やく食八窓の風より
もうふなが。海と、うてモヒと、かくして、食ま
き入へ新月の夜、うらがめ。海と、月と、時と

夢のむきと、さへ。えと、洗ふと、まよひと、山傳と
せと、すきや。音あはれ、あくまや。あくまよと、そ
まよすきやうと、うなまく。おふかきと、まくと、
とつまく。はねよがくと、まくと、のうり

室町幕年記稿附脱金拾金二入

清家向、二家の南から、清家なりと、清りて、山傳
あり。ある産業と、うどもあつて、日あよ酒、と、
まよ魚と、うどもあつて、うどもあつて、うどもあつて、
また、放南あひまよじつひ、いづ。ひうちの事なる
べし。よ家と、おがく。た、おがくよ、いうと、体と
たのと、ひつて、うどもあつて、うどもあつて。せうれ、病と、それば、行
とすが、あがく。うまく、病とのとて、のと、ふくら

まつてゐる。其十片の金をもたまへ
ふ氣とほれ。おまけにあはり御園乃山はまへ
御山へおづくと、仰されば。モジモジと云ふ。今も
そ前にありと。幸く育むよりのうぢりと云ふ。御
ちの儀へうりてそまらがさうだ。同日よえ。御のねを御殿へと
また御室の當をすを幸の儀をおましまひしなとせり。をな代
の御事

附板食付賀年風吉都と申譯。たゞこ。三條橋頭
よき金ごと捨て人あり。爲めまくいふわざとんや。
川河。かくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
あれ。ひとちねはとんじだせねひとうが。まくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

うけど、また後^おのやまとひきと、船と
きつてゆのうわら。先^お舞乃山とおとこてとおと
たまし。おも子^おとおとと。おととととととととと
とと。六月とく。おととおとととととととととと
とと。おととととととととととととととととと
ととととととととととととととととととととと

